

音階と調号に関して保育科学生が起こし易い間違い

黒瀬久子

1. はしがき

第1学年の最後または第2学年の最初の授業の際に、ハ長調・ト長調・ニ長調・ヘ長調および変ロ長調の5つの調それぞれの音階・調号・和音および移調に関する基礎的なテストを行い、各設問に対する解答の正・誤および無解答の関連を調べ、その結果から学生の類型化を試みた。この目的は各項目に対する学生の理解の程度を調べるとともに、理解しにくい事項や誤り方に見られる共通点を引き出すことであった。その結果、各項目に対する理解の到達度の概略を把握できたが、理解を誤る考え方に対するヒントを見いだせなかった¹⁻³⁾。そこで、本報では同じ資料を用い、音階と調号に関してどのような間違いをする学生が多いか、またどのように理解を誤ると実際に学生が誤ったような解答になるかを検討し、次のことが明らかになったので、その詳細に関して報告する。(1)各音階の主音の起点となる間あるいは線を1つ取り違ったか間と線を取り違ったか、あるいは(2)変種調を嬰記号で回答するような、全く理解していないとはみせないが、記憶が厳密でないことに起因すると考えられる間違いの多いことと、(3)設問に対して調号が間違っても有り得ない位置やその組み合わせに調号を付けるような間違いは見られなかった。

先の結果は、現在本学において行っている伴奏法の教育において、どのような項目にさらに重点を置くように改善すればよいかの指針となり、本報の結果はその際に具体的にどのように注意しながら説明をすればよいかの指針となると考えられる。

2. 材料および方法

前報¹⁻³⁾と同様、本学保育科平成4年度入学生105名と平成5年度入学生117名に対し、前者では第1学年の最後の授業において、後者では第2学年の最初の授業において、五線と五線上にト音記号とヘ音記号を印刷し、各調（ハ長調・ト長調・ニ長調・ヘ長調および変ロ長調）の音階・調号・主要三和音および属七和音を書くこと、および簡単な曲の移調を60分間に行うことを課題としたテストを行った。本報では、その解答のうちの音階と調号に関する部分を扱った。

表1. 平成4年度入学生の解答に見られた音階と調号に関する間違いとその類型

学生 番号	音 階					調 号				
	ハ	ト	ニ	ハ	変口	ハ	ト	ニ	ハ	変口
音階記号誤認を含む										
4-10	CI (1)	CI (1)	CI (1)	CI (1)	CI (1)	3* (a)	3† (a)	3† (a)	3* (a)	3* (a)
4-58	E (6)	CI (1)	CI (1)	CI (1)	CI (1)	—	—	—	—	—
4-61	○	CI (1)	CI (1)	G (4)	E	—	—	—	—	—
4-40	○	○	CI (1)	CI (1)	CI (1)	○	3* (a)	3* (a)	—	—
4-52	○	○	○	○	CI (1)	—	—	—	—	b4(d)
音の範囲を間違った										
4-28	CH	GH	DH	FH	—	—	—	—	—	—
4-9	CH	AG	—	—	—	b1(b)	—	—	—	—
4-50	G	GA	DE	E	—	—	—	—	—	—
4-53	C	FG	DE	EF	—	—	—	—	#1(c)	—
4-49	○	○	DE	○	G (3)	○	#1(c)	○	—	—
主音の間違いを含む										
4-71	Ais (2A)	E (3A)	H (3A)	#D (3A)	G (3A)	#7(Ad)	臨時(A)	○(A)	#6(A-c)	○(A)
4-51	F (B)	A (B)	C (4)	D (3)	G (4)	b1(Bd)	#3(Bd)	—	#2(Bc)	—
4-100	—	E (2b)	H (3)	D (3)	G (3)	—	b1(b)	b2(b)	#1(c)	b5(d)
4-39	H (4)	—	—	—	—	—	—	—	—	—
4-62	H (4)	E (2b)	G (5b)	A (6b)	F (B)	#4(Bd)	#1(Bc)	#3(Bc)	#3(Bc)	#5(B-c)
4-87	H (4)	—	—	G (4)	F (4)	—	—	—	#1(c)	—
4-86	○	○	○	D (3)	○	—	—	—	—	—
4-14	○	F (4)	○	○	○	—	—	#4(d)	3† (a)	○
4-75	○	○	○	○	G (3)	#5(d)	#5(d)	#1(c)	#2(c)	○
4-36	○	F (4)	○	○	○	—	—	—	b1(c)	○
4-88	○	○	○	○	A (4)	—	—	—	#6(c†)	b1(c)
4-16	○	○	○	○	A (4)	#3(d)	○	○	#1(c)	○
4-60	○	○	○	○	A (B)	○	○	○	#6(c†)	b1(B-c)
4-105	○	○	○	○	A (B)	○	○	○	#6(c†)	#5(c)
4-80	○	○	○	○	A (4)	○	○	○	○	#3(c)
4-45	○	○	○	○	E (4)	○	○	○	○	○
4-68	○	○	○	○	A (4)	○	○	○	○	○
4-81	○	○	○	○	G (3)	○	○	○	○	○
その他の間違いを含む										
4-77	和音 (7)	和音 (7)	和音 (7)	和音 (7)	和音 (7)	—	—	—	—	○
4-29	○	○	○	○	—	—	—	—	—	—
4-72	上加 (8)	○	上加 (8)	○	—	#1(d)	○	3† (a)	3† (a)	—
音階の回答に間違いを含まない										
4-97	○	○	○	○	○	—	#2(d)	#3(d)	—	—
4-5	○	○	○	○	○	—	—	—	—	b1(c)
4-54	○	○	○	○	○	—	—	—	#6(c†)	—
4-46	○	○	○	○	○	—	—	—	#5(c)	—
4-84	○	○	○	○	○	b3(Aa)	b2(Ab)	b1(Ab)	b4(Aa)	b5(Aa)
4-11	○	○	○	○	○	—	—	—	—	b1(c)
4-91	○	○	○	○	○	—	—	—	—	b1(c)
4-83	○	○	○	○	○	—	—	—	—	#1(c)
4-23	○	○	○	○	○	—	—	—	—	#4(c)
4-27	○	○	○	○	○	—	—	3† (a)	#6(c†)	#5(c†)
4-73	○	○	○	○	○	—	—	—	#1(c)	○
4-85	○	○	○	○	○	#3(a)	○	○	b2(d)	b1(c)
4-63	○	○	○	○	○	#3(a)	○	○	#1(c)	—
4-74	○	○	○	○	○	—	—	b1(b)	#2(c)	○
4-6	○	○	○	○	○	—	—	—	#6(c†)	#5(c†)
4-13	○	○	○	○	○	—	—	—	#6(c†)	#7(c)
4-76	○	○	○	○	○	—	—	—	#6(c†)	#5(c†)
4-79	○	○	○	○	○	—	—	—	#6(c†)	#5(c†)
4-65	○	○	○	○	○	—	—	—	#5(c)	b4(d)
4-89	○	○	○	○	○	—	—	—	#6(c†)	#5(c†)
4-56	○	○	○	○	○	—	—	—	#7(c)	○
4-47	○	○	○	○	○	—	—	—	#6(c†)	○
4-59	○	○	○	○	○	—	—	—	#6(c†)	○
4-90	○	○	○	○	○	—	—	—	#6(c†)	○
4-101	○	○	○	○	○	—	—	—	#6(c†)	○
4-21	○	○	○	○	○	—	—	—	#6(c†)	b3(d)
4-93	○	○	○	○	○	—	—	—	#6(c†)	#4(c)
4-104	○	○	○	○	○	—	—	—	#6(c†)	#5(c†)

○ 正解 — 無回答
 CI 音階記号の誤認 アルファベット2字(XY) Xの音からYの音までを記入
 主音の間違い アルファベット1字は主音の位置を示す
 和音 カデンツを記入 上加 上の加線が欠けている
 臨時 余分な臨時記号を付けている #XまたはbY 間違って記入した調号の度数
 3† 調号が3度高い
 各番号の右下のカッコ内の数字または文字は次の間違いのタイプを意味する

共通 (大文字)
 A 音階と調号の関係で、他の音階として成立する (ただし知調)
 B 音階と調号の関係で、他の音階として成立する

音階 (数字)
 1 音階記号と誤認して回答
 2 間を1つ下から回答
 3 線を1つ下から回答
 4 線と間を間違っ回答
 5 間を2つ下から回答
 6 間を1つ上から回答
 7 カデンツ
 8 加線の間違い

調号
 a 高音部記号と誤認して回答
 b 嬰他調を変記号で回答
 c 変種調を変記号で回答
 d 設問の調に対して調号が多い
 e 設問の調に対して調号が少ない
 f 主音は正解であるが、調号の間違いで半音高い調を回答

表2. 平成5年度入学生の解答に見られた音階と調号に関する間違いとその類型

学生 番号	音 階					調 号				
	ハ	ト	ニ	ヘ	変ロ	ハ	ト	ニ	ヘ	変ロ
音の範囲を間違った										
5- 41	○	FA	—	—	—	—	—	—	—	—
5- 6	○	○	EE	○	○	○	#3(d)	#6(e)	○	○
5- 5	○	○	○	○	AA	#2(a)	—	—	—	b1(e)
5- 49	○	○	○	○	AA	○	○	#6(f)	○	○
5- 57	○	○	○	○	AA	○	—	#2(e)	—	—
5- 36	○	○	○	—	AA	○	○	—	—	#3(e)
5- 1	○	○	○	○	AA	—	—	—	—	—
5- 35	○	○	○	○	EE	○	○	○	—	b3(e)
5- 44	○	○	○	○	GG	○	—	#6(e)	—	—
音階の回答に関連いを含まない										
5- 68	○	○	○	○	○	#2(d)	#5(a)	○	—	b6(d)
5- 15	○	○	○	○	○	#2(d)	—	#1(e)	—	—
5-112	○	○	○	○	○	b2(b)	○	b2(e)	○	○
5- 16	○	○	○	○	○	b1(b)	○	○	○	○
5- 84	○	○	○	○	○	○	#3(e)	○	○	○
5- 75	○	○	○	○	○	○	#1(e)	○	○	b3(e)
5- 9	○	○	○	○	○	○	♭1(b)	#2(e)	○	○
5- 45	○	○	—	○	○	○	—	#7(e)	○	○
5- 65	○	○	○	○	○	○	○	#6(e)	#5(e)	#5(e)
5- 47	○	○	—	○	—	○	—	#6(e)	—	—
5- 82	○	○	○	○	—	○	○	#6(e)	—	—
5-105	○	○	○	○	○	○	○	#6(e)	○	○
5- 83	○	○	○	○	○	○	○	#5(e)	—	—
5-103	○	○	○	○	○	○	○	#4(e)	#3(e)	#3(e)
5- 53	○	○	○	○	○	○	○	#3(e)	b1(e)	b1(e)
5- 58	○	○	○	○	○	○	—	#2(e)	—	—
5-114	○	○	○	○	—	○	○	#2(e)	—	—
5- 8	○	○	○	○	○	○	○	#1(e)	#1(e)	#1(e)
5- 18	○	○	—	○	—	—	—	#1(e)	—	—
5-110	○	○	○	○	—	—	—	#1(e)	—	—
5-111	○	○	○	○	○	○	○	b2(e)	b1(e)	b1(e)
5- 67	○	○	○	○	—	○	○	b2(e)	—	—
5- 38	○	○	○	○	○	○	○	○	#5(e)	#5(e)
5- 42	○	○	○	○	○	○	—	○	○	#5(e)
5- 56	○	○	○	○	○	○	○	○	○	#4(e)
5- 99	○	○	○	○	○	○	○	○	○	#2(e)
5- 60	○	○	○	○	○	—	—	—	—	#2(e)
5- 52	○	○	○	○	○	—	○	—	—	b6(d)
5- 73	○	○	○	○	○	○	○	○	○	b6(e)
5- 64	○	○	○	○	○	○	○	○	○	b5(e)
5- 86	○	○	○	○	○	○	○	○	○	♭4(d)
5- 12	○	○	○	○	○	○	○	○	○	b3(d)
5- 78	○	○	○	○	○	—	○	○	○	b3(d)
5- 34	○	○	○	○	○	—	○	○	—	b1(e)
5-117	○	○	○	○	○	—	—	—	—	b1(e)

注は表1と同じ。

3. 結果

音階と調号に関する各設問に対する解答の間違いの主なタイプによって学生を分け、表1と2に示した。これらの表から次のことが分かる。

3-1 音階

3-1-1 平成4年度入学生

表1に示すように、5つの調に対して約1/3の学生において1問以上に解答の間違いが見られた。その内訳は次の通りである：音部記号を誤認した学生は5名（延べ14問）（うち3名は主音の間違いを含む）、音の範囲を間違った学生は5名（延べ、11問）（うち2名は主音の間違いを含む）、主音を間違った学生は18+5名（+より後は前2項に分類された学生による、延べ33+6問）、カデンツを記入した学生は1名（延べ5問）、上の加線を間違った学生は2名（延べ2問）であった。

調が異なっても同じタイプの間違いをする傾向が見られ、5つの調に関する設問のすべてに対して同じタイプの間違いをしたか解答をしなかった学生は7名、複数の調に対して同じタイプの間違いをした学生は5名であった。これに対して、異なったタイプの間違いをした学生は4名だけであった。残りの12名の学生はいずれか1つの調（主に変口長調）に対して解答を間違い、他の調に対しては正解か無解答であった。

3-1-2 平成5年度入学生

同じ編成の教授陣で同じカリキュラムに従って授業をしたにもかかわらず結果は大きく異なり、9名の学生が音の範囲を間違っただけであった。

平成4年度入学生に対しては第1学年の学年末試験の前に、平成5年度入学生に対してはその後に行い、前者では設問を口頭で指示し、後者に対しては印刷によった。これらの違いが正解率が高くなった原因の一端であるが、それらだけによってここに見られたような大きな差を説明できるかどうか疑問である。

3-2 調号

調号に関する間違いには1「調号の個数の間違い」、2「調号が3度上」、3「余分な臨時記号を付けた」の3通りが見られた。それらの人数は調によって異なり、次の通りであった（カッコ外の数値は平成4年度入学生、内の数値は平成5年度入学生に関する人数である）：すなわち、個人特有の間違いのパターンがあり、その一方ではそれぞれの調に関して特定の

個数の調号を付けた人数が多く、3度上の間違いの大部分が3名の学生に集中して見られた。また調によって特定の間違い易いパターンのあることが分かった。それらの理由については考察において記す。

調号	ハ	ト	ニ	ヘ	変口
# 7	1			1(1)	1
6				14(7)	1
5		1	1(1)	2(1)	9(3)
4		1	1	(1)	2(1)
3		4	1(2)	1	1(2)
2		1(3)		2(4)	1(2)
1	1		2(1)	7(4)	1(1)
b 6					(3)
5					2(1)
4				1	2(1)
3	1				1(4)
2		1(1)	1	1(3)	
1	1	2(1)	2(1)		7(5)
3度上		1	4	4	1
臨時		1			

4. 考 察

先に述べたような間違いをした原因を調べると、例えば4-58の学生がハ長調に対する音階の主音をEとみなせる解答をしたのは、間を1つ上から始めたためである。4-61の学生がヘ長調に対する音階の主音をGとみなせる解答したのは、線と間を間違えて始めたためであると考えられる。しかし、この学生が変口長調に対する音階の主音をEとみなせる解答をしたことに関する原因は見いだせなかった。同様な現象は調号に関する間違いに関しても推定できる：例えば、4-9の学生がト長調の調号としてbを1個つけたのは嬰種調を取り違えて変記号で解答し、4-53の学生がヘ長調の調号として#を1個つけたのは変種調を嬰記号で解答したためであるとみなすことができる。4-10の学生はすべての調に関して音階と調号を間違っているが、それは高音部記号と間違っただけという1つだけの理由で説明できる。4-71の学生もすべての調に対して音階と調号を間違っているが、これは長調を短調と間違っただけによるものと考えられる。すなわち、複数の調に対して音階と調号を間違った学生は、1つの勘違いをしたことによる。しかし、その方向は学生によって異なる。そこで、勘違いの共通性をさらに検討すると、間違いは音階に関して8つ(1-8)、調号に関して6つ(a-f)、両者の関連に関して2つ(A-B)の型に分けられるので、この型を表1および2にカッコを付けて付記した。それらの人数は次の通りである：

	ハ	ト	ニ	ヘ	変口	延人数
1 高音部記号	1	3	4	3	3	14
2 間を1つ下	1	2				3
3 線を1つ下		1	3	4	5	13
4 線と間の間違	2	2	1	3	4	12
5 線を2つ下			1			1
6 間を1つ上	1			1		2
7 カデンツ	1	1	1	1	1	5
8 加線の間違	1		1			2
小計	7	9	11	12	13	52
A 短調に成立	1	1	1	1	1	5
B 他の調に成立	1	3	1	1	2	8
小計	2	4	2	2	3	13

	ハ	ト	ニ	ヘ	変口	延人数
a 高音部記号		1	4	4	1	10
b 嬰種調をb		3	3			6
c 変種調を#				27	16	43
d 多すぎる	4	7	3	2	8	24
e 少なすぎる			2		7	9
f 半音高い調				14	7	21
小計	4	11	12	47	39	113
A 短調に成立	2	2	2	2	2	10
B 他の調に成立	1	2	1	2	2	8
小計	3	4	3	4	4	18

音部記号誤認を含む学生

5名がこのグループに属した。ここで見られた音階に関する延べ17の間違いのうちの14は、音部記号をト音記号と間違っただけであると解釈すれば、主音の位置と音階はともに説明が付き、起こり得る間違いである。またこのグループは調号に対してほとんど正解をしていない。延べ7つの調号の間違いのうちのb4以外の6つの間違いは同様な理由で起こったとみなすことができる。b4の間違いは主にこの理由によるが、同時に一部のbの位置を間違えたと考えれば起こり得る。4-58の学生に見られた主音の間違いはハ長調に関しては上行で、それ以外では下行で解答しているが、音部記号を間違っただけだと考えると起こり得る型である。すなわち、これらの学生に見られる間違いは、主にヘ音記号をト音記号と間違っただけに起因する(延べ20/24)。

音の範囲を間違った学生

5名がこのグループに属した。4-28の学生は、上の加線を考えない。4-9の学生に見られる2問の間違いは上端の1音が不足している。西洋音階が7音音階であることからすれば、一概に間違いと見なせない。4-50の学生が間違った2問と4-49の学生が間違った1問はともに上に1音多い点で共通している。4-53の学生に見られる2問の間違いは、下端に1音多く、途中の間を抜かして上端は正しい位置に終わっている。

平成5年度入学生では9名がいずれか1つの調に関して音の範囲を間違った。そのうち8名に見られる間違いは、線を上か下の間と間違うか下の線と間違ったためである。このグループに見られる調号に関する間違い9個のうちの5個までは、この同じ理由による。しかし、へ長調の調号を間違った（＃6）3名は嬰へ長調と間違った可能性があり、変ロ長調の調号を♭3とした学生が音階に対する解答の間違いとも関連があり、変ホ長調と間違った可能性がある。

主音の間違いを含む学生

18名がこのグループに属した。なお、その他に4名に関して主音の間違いが見られたが、他の間違いと関連付けてすでに記した。これら18名の学生に見られる延べ32の間違いのうちの23までは、線を1つ下から解答したか、線と間を間違って解答したという2つの理由だけで説明できる。また、延べ13は正解でないが、他の音階としては成立する。先に示した2から4までおよびAとBの理由で説明できない間違いは他の設問に対しても正解率が高い2名の学生において1問ずつに見られた。約200名の学生に対する5問ずつのテストでは、記入間違い等によりこの程度の説明できない解答の起こることは避けられないと考えられる。

調号に関する間違いに対する考察は、音階に関する間違いを含まない学生に関する項で併せて行う。

音階に関するその他の間違いを含む学生

3名がこのグループに属した。1名はすべての調に対してカデンツの解答をしている。これは質問の意味の受け止め方を間違ったためと考えられる。2名は1問ずつに対しては上の加線を付けているが、もう1問に対しては付けていない。3名とも調号に対してはほとんど正解を示さなかった。へ長調に対して＃を付けたことと上の加線を欠いたことの原因は考えられない。また、ニ長調とへ長調に関して3度上に記したのは、間違ってもト音譜表上に記入したためであると考えられる。

音階に関する間違いを含まないが、調号に関する間違いを含む学生

28名がこのグループに属した。うち24名は5つの調に関してすべて音階は正解であった。こ

のグループの学生と主音に間違いを含む学生に見られる調号に関する間違いには、次の傾向が見られる：

- (1)質問した調に対する調号としては間違いであるが、いずれの調とも考えられないような調号の間違いは見られなかった。
- (2)最も人数が多かったのはへ長調の調号を＃6と解答した学生で計21名であった。これはへ長調を嬰へ長調と間違っただけであると考えられる。
- (3)次に多かったのは変口長調の調号としてbを1つ付けた学生であった。いずれも変口長調の音階が始まる位置に付けていた。このような間違いをすればへ長調に対しても間違うはずである。このような学生はへ長調に対してほとんど無解答であり、嬰へ長調と間違っただけの学生が2名、変口長調と入れ換えた解答をした学生が1名であった。
- (4)3番目に多かったのは変口長調を口長調と間違っただけの学生（計12名）であった。
- (5)1名はすべての音階と調号を短調として解答し、他の1名はすべての音階に対して正解であったが、すべての調号に対して短調で解答した。

すなわち、ある程度は理解しているものの不正確な覚え方のために(2)から(5)のように関連のある調と間違っただけの人数が延べ36名で間違いの27.9%を占めた。

音階と調号を低音部譜表上に解答を求めたのは、音楽実技の演習においては特に大譜表と接することがほとんどであるためである。へ音記号をト音記号と勘違いしたと思われることについては、学生達の過去（小・中・高校）の音楽教育では、へ音記号を使用する機会のごく一部の学生（鍵盤楽器経験者、低音弦・管楽器経験者等）を除いて皆無と言ってよいことに起因すると考えられる。

また、音階における主音と音名の関係の理解が不十分なことが設問に対する解答に間違いや、無回答が多い原因であると考えられる。また、音名を表すためには、英語音名・ドイツ語あるいは日本音名が混用され、初心者にとってそれらの対応を円滑にできにくかったことが原因の一つと考えられる。卒業後も音名に接する機会の多いことを考えると、特にコードネーム（英語音名）に習熟させなければならない。

音階は順次進行するわけであるが、なかには間や線を飛び越えて進行したものや、五線よりも上または下に音符を記すときの加線の付記が理解できず、音符の位置のみを順次高くして解

答した学生もあり、五線との関係を十分理解させる必要のあることが明らかになった。

調号についても、音階と同様にヘ音記号をト音記号と誤ったことは、ヘ音記号の使用頻度と関係があるように思われる。

また変種調と嬰種調の区別が明確でなかった。これらは義務教育においてすでに嬰記号・変記号の学習がなされているにもかかわらず、記憶から遠ざかり、また理論的な内容を敬遠する傾向の影響と考えられる。

保母養成校で扱う子どもの歌を検討すると、使用するテキストにもよるが、調号面では二長調の曲が多いように思われ、続いてへ長調・ト長調の曲・変口長調・変ホ長調がこれに続くと思われる。したがって、これらからも嬰種調・変種調ともに調号2コマまでについて理論と実技を徹底させることと、実技において種々の曲を経験させ、自学自習できるところまでの能力を養うための指導方法を再考する必要を提起してくれたように思われる。

口では子どもの頃からドレミファソラシドと階名唱しているが、これらが実技面で活用・応用できるようにすることが理想である。そのためには、理論と実技が空論でなく密接なつながりを持ち、視野を広げ、さまざまな曲に対して挑戦するという学生達自身の姿勢も必要である。このテストで明らかになった解答の間違いを念頭に、基本事項としての音階と調号について正確な指導の徹底が教師側の課題として見えてきたように思われる。

なお、各調の音階に対して71名(67.6%)から116名(99.1%)、調号に対して44名(41.9%)から88名(75.2%)が正解であった。しかし、音階と調号に関して1問でも間違った学生は今回の分析の対象に含まれる。しかし、調によって異なるが、音階に対して1名(0.9%)から25名(21.4%)、調号に対して15名(14.3%)から32名(27.4%)の学生が解答をしていなかった。このような学生の数は無視できないが、これらの学生がなぜ解答をしなかったのか—どこかどのように理解できなかったために解答をしなかったのか—は今回の分析では対象に含める方法がないので、その分析は別途に考えなければならない。

以上の結果は1つの短期大学の学生に見られた結果であり、カリキュラムや教授陣が異なれば結果は異なるだろう。しかし、その一方では、ある程度の共通性が見られるだろう。今後このような問題を検討したい。

5. 結論

個人特有の間違いのパターンがあり、その一方ではそれぞれの調に関して特定の個数の調号を付けた人数が多く、調によって特定の間違い易いパターンのあることが分かった。設問に対しては間違った調号であっても全く有り得ないような調号は見られず、また高音部記号との間違い、主音を始める間または線の1つ上か下のそれとの間違い、間(または線)とすぐ上か下

の線（または間）との間違い、長調と短調の間違い、嬰種調・変種調に対する理解の不足が多かった。すなわち、ある程度は理解しているが、間違いの多くは正確さを欠くために生じたものであると考えられる。個人の特徴とこれらの点に注意すれば、教育効果を向上できると考えられる。

6. 要約

本学保育科平成4年度入学生105名と平成5年度入学生117名に対し、第1学年の最後または第2学年の最初の授業において、五線と五線上にト音記号とヘ音記号を印刷し、各調（ハ長調・ト長調・ニ長調・ヘ長調および変口長調）の音階・調号・主要三和音および属七和音を書くことおよび簡単な曲の移調を60分間に行うことを課題としたテストを行った。その結果のうちで音階と調号に関してどのような間違いをする学生が多いか、またどのような勘違いをすれば実際に学生が間違ったような解答になるかについて検討し、次のような結果が得られた。これらは授業の際にどのような点に注意しながら説明すればよいかの指針となると考えられる。

1. 個人特有の間違いのパターンがあり、その一方ではそれぞれの調に関して特定の個数の調号を付けた人数が多く、調によって特定の間違い易いパターンのあることが分かった。
2. 音階に関する間違いは8通りあり、主に高音部記号、主音を始める間または線の1つ上か下のそれとの間違い、間（または線）とすぐ上か下の線（または間）との間違い、長調と短調の間違い、嬰種調・変種調に対する理解の不足が多かった。
3. 調号に関する間違いは6通りで、主に関連のある調との間であった。
4. 音部記号の間違いの5/6はヘ音記号をト音記号に間違っただけに起因する。
5. 音の範囲に関する間違いは、平成4年度入学生では、音階の上端または下端のいずれか一方における1音の過不足の形であった。平成5年度入学生では、主に線を上か下の間と間違るか、下の線と間違っただけであった。
6. 主音に関する間違いは、主に線を1つ下から解答したか、線と間を間違っただけであった。

本研究にあたり、種々のご指導を賜った水産大学校名誉教授 前田 弘博士に厚く謝意を表

します。

文 献

- 1) 黒瀬久子：保育科学生の伴奏に関する基礎的理解Ⅰ．調と和音，下関女子短期大学紀要，第12号，73~89（1993）
- 2) 黒瀬久子：保育科学生の伴奏に関する基礎的理解Ⅱ．移調，下関女子短期大学紀要，第12号，91~105（1993）
- 3) 黒瀬久子：保育科学生の伴奏に関する基礎的理解Ⅲ．学生の類型化，全国大学音楽教育学会研究紀要，第6号，79~91（1995）